

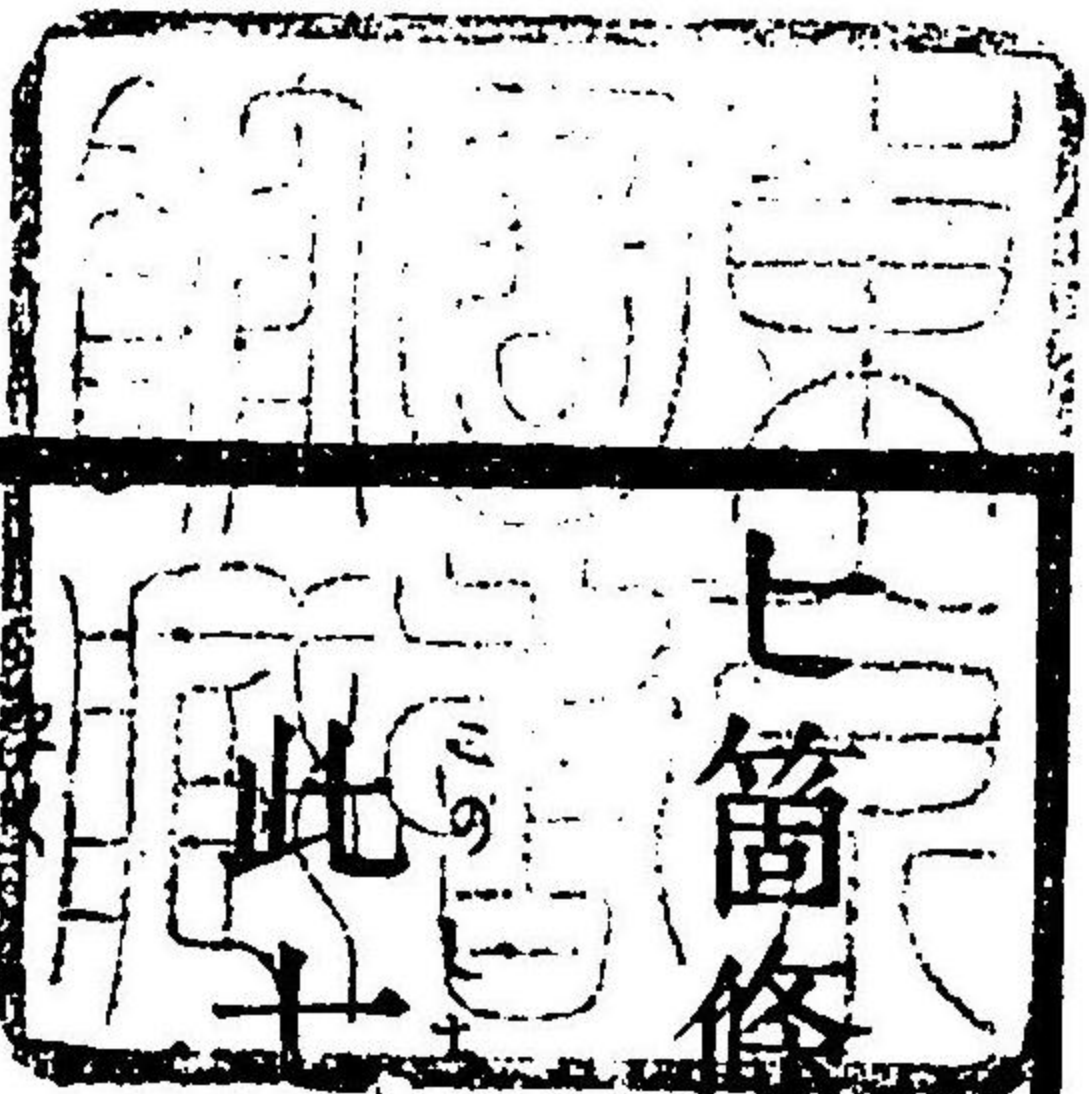
8

164

自修鏡

全

東 京 圖 書 館				
一	六	六	八	
冊	号	架	函	類



七箇條鏡草

此十箇條の教は黒住大人に。世に御坐し時言

卷を文に可恐き。天照坐日大御神の惟神は

大道を是天の下に在と有は人に。に尊き卑き

女童に間無く。遍く告諭して。常に心の底に勅

さしめ。朝れ夕れと忘は。こと無く。其言其行

を務免しめて。識らば知らば帝の則に順ふ。ち

ふ語の如く。五十鈴川は水上まで自ら溯洄ら  
しめて各心神を清く正しく滌ぎ明め神習せて  
むとて目安く記出られし文な依を山の井に  
水の甚淺げに聞成を人等も多有はを老子の  
我言は甚知り易く甚行ひ易くて天下能知は  
こと莫く能行ふこと莫しとも下士を道を聞  
て大笑ふと言れし如く其知至易く行ひ

易きぞ即ち神隨なる大道よて其淺をのに聞  
成さ依、中よ幽く妙な依道理も籠有依事に  
し在れむ神典仙籍よ所見多依節二を其條二  
の下に聊の汲出て童蒙の徒よ示はよれむ。  
神國の人よ生れ常に信心無き事。

神國とて元赤縣州より皇國を指て言へ依稱  
れ依事先師氣吹屋大人の詳説有れむ今更此

所よと云べ先皇典よは神功皇后の御紀よ新  
羅の王が吾東よ神國有りて日本と言ふと聞  
里と云ふ事見え陽成天皇の御紀よと我國の  
神國多依事を云ニと宜ひ宇多天皇の御紀よ  
も我朝を神國れりとして朝夕よ天神地祇を禮  
拜祭と賜ふ事を載し給へり此等神國ちふ文  
字の出所れるの大神貫道主と我神國を大陽

日神の本國よして神仙不死の壽域なり異國  
にても長生不死を求依者を皆東海よ向ひ蓬  
萊方丈生洲瀛洲祖洲等の仙境有りて羨み其  
地よ到らむ事を願ひ天竺の法道仙人震旦の  
徐福安期生の輩と我國よ來てこそ仙果を証  
し素意を遂られ多きと古記よ見え侍依と云

へ里。玄道曰方丈とた實を天皇祖神の鎮座に  
幽宮金玉瑠璃宮の在所よて淡路州を云

ひ祖洲とて自擬島蓬萊瀛洲とて海神宮の事  
れ依由故翁の扶桑國考三神山考天柱五嶽考  
等よ説明されしを見依可し法道仙人の事  
扶桑畧記元亨釋書よ見え徐福安期生の事は  
史記の封禪書神  
仙傳等よ見ゆ  
ちて此大地は元高天原よ無

始より御坐せ依三柱の天皇祖神の造化出給  
へ依物よて伊邪那岐伊邪那美二柱大神の天  
神の御言依しを受賜ひて修固成給ひ次ニ須  
佐之男大神大名持少彦名大神等の味く能く

固成し給へ依物よし在れを御國をのみ神國  
ちふ道理を無きよ似有れど是將深き契有依  
事と聞え了彼二柱大神の此國土を修造成む  
と爲給へ依よ先此大八洲國を産出し賜ひ此  
御國よて天照大御神月夜見大神及び止事  
き御神等を生奉り給ひて天地の造化の本基  
を建立給ひし御事譬を稻を種付依よ必び善

田を擇びて苗代地を作為れ如き。大御所業  
とぞ。窺ひ奉らば。此苗代の譬を吾友常磐井嚴  
物有。然有む。大地の萬國を多有。中よ。二柱  
大神の御産坐。依國とてを。別よ在依。こと无く。  
又天照大御神を御父の大神。大命の隨よ高  
天原を悠久よ統御めして。所有は萬世界の。大  
君主よ坐依事。申はと更れ依を。大御神と。須佐

之男大神との御誓約の間よ生坐依。正哉吾勝  
二速日天之忍穗耳命の太子。天津日高日子番  
能邇。藝命を皇産靈大神。天照大御神の殊な  
る大御心よ因て。萬國の人民を能く幸ひ治め  
賜むむとして。高天原にして。天津日嗣の天津  
高御座よ坐奉りて。天津御璽の三種の神寶を  
授賜ひ。別よ五伴男御神等を始免。最英傑た依

神等を倍從へ給ひ且天下を總治給ふ御政を  
も授奉りて筑紫日向の高千穂峯に天降し  
賜ひて此大地の大君主と爲させ給へり。扱此  
邇ニ藝命より當今の天皇命に御世まで御代  
を百二十五代年を四千九百十餘年を來經ぬ  
れど萬古一日の如く天下を照し治め賜ひ。此  
直日靈に千萬御世の御末に御代まで天皇命  
をしと大御神の御子と坐ました天津神の御

心を大御心として神代と今と隔無く神隨安  
國と平く所看しけ座大御國に在りけ  
れを云ニ。天皇命を即ち天照大御神の御子  
に坐しませし。天皇の御統を日嗣と申はた日神  
の御心を御心として其御業を嗣坐す故に  
又其御座を高御座と申はた日神の御座に  
の故なり。日神の御座を次ニ受傳へ坐て其  
御座に大坐す。天皇命に坐せむ日神に全等  
く坐し事決しと猶委曲し。且天神皇孫の御末に  
く論をれしを見依べし。更なり。神代より大  
功有るし。神等に御裔に至  
依まで。御二代。天朝に各其職を守り仕奉ら

し將其御治めを被り居家天下萬姓と皇孫神  
孫其後ならぬと大抵稀な家程もて數れらぬ  
我徒よ至家まで累世限り無き其深仁大澤を  
蒙り居家と實に萬國よ比類无き事にして萬  
國は神國と羨み申はと。おま宜ならむや。彼宋  
宗の我皇統の易らせ賜えび大臣等の職を世  
よし給ふを聞て是太古の道なりとて羨みし  
事をと西洋人フルの環國論は何れと皇國  
の美事を説へはをも思ふべし。此等其詳説を

先師等の書叔と玄道と考記せる事の有  
れむ。今を大畧中の大畧を云ふはみぞ。猶先  
師の説よ。此國土人民共よ。天照大御神の御物  
よて天皇命を其を治免賜ふ御職に坐は事著  
明く。且國土人民の天皇命よ御坐はを國二の  
候を其を持別て。領り治むは道理よぞ在りけ  
は。玄道曰。玉銚百首よ。皇神の隣然く所思は人  
神の御民よ。世の中は人悪くをれ勤めまよ。天照  
多物作は人民を御寶作らびむ。如何よせむと



の人民苦困むは」とも  
詠れしは是故なり。 ちて邇ニ藝命の天降坐  
以時ニ御祖神等此國土を治免給む御政事  
の方をも委曲ニ論し給へはの其趣何ニ在り  
しと言ふ。世ニ有依事を盡く天神地祇の御  
靈ニ資依事ある故ニ神祭の事を專と御傳へ  
坐し先荒振神を祭り和めて崇有せば諸神等  
を夫ニ齋祭りて其御惠み此彌益ニ加依

べく御定免坐せり。其悉皆天下の青人草を隨  
順へ惠み給ふ御態より他の事無し。 玄道曰是  
大本より源親房卿も宣へ依如く祭事即ち政  
事一有り無き大道は依の天皇祖神の大  
御口自ら御傳坐せ依物より祝詞を更れり神  
代の古傳を皆其御教語な依の天皇命を更に  
と申さば大臣等も至依まで其御教語の隨は  
順ひて曲び邪に己命の狡意を交へ賜をば行  
ひ坐依を惟神な依道と云ひ。 斯て邇ニ藝命よ  
其御教を本教と言ふなり。 其御由緒の如  
り次ニ御二代の天皇命よと。 其御由緒の如

く御行ひ有て。神事を第一に成し給ひ云。玄道  
曰。天皇命の御自ら。神事。仕奉。里給ひし事を  
祈年月次新嘗の大祭を更なり。年中の御政を  
半を遇て御祭なは事も。令式格西宮記北山抄  
江家次第等を見て知。依可く。中古の亂後を廢  
絶せし事と多有れども。天皇命は。中今も  
毎朝御行水。よて。石灰壇と云ふ。よ。出御有て。伊  
勢の大御神。石清水の大神を。始め奉りて。二十  
二社を。御遙拜有りて。天下の人民の安全を。祈  
らせ賜へ。依御事な。依。若し。御不念の時。白  
川殿御代拜を。務められ。白川殿。故障有。依時を。  
其時の。關白殿。御代拜を。爲され。依。例れ  
里とぞ。如何。よ。可。恐。き。事件。なら。ざ。や。後世よ

漸ニは外國風の事をも。交へ用ひ給ふ御世と  
成りし。うと。右。み。由。緒。に。因。り。て。朝。廷。の。禮。儀。作  
法を。記。さ。せ。給。へ。依。御。典。等。皆。神。祇。に。關。係。事。を  
先と爲られ。先令義解と云ふ。十卷有りて。令  
條の御典な。依。其。第一。は。神。祇。令。と。て。神。祇。に  
關係。依。御。令。を。載。され。延。喜。式。と。云。ふ。と。五。十。卷  
有りて。式條の御典な。依。其。初。卷。よ。軍。第。十。卷

迄までを神祇じんぎ式しきとて。神祇じんぎに關あつ係ひ御式みしきを載しされ。後あと四十しじゅう卷まきも云いひ以もて行ゆけむ。神祇じんぎの事ことに約つま係ひ程ほどの事ことにて。玄そら道みち曰いふ伴ばん信しん友ゆうの說せつに諸しよ國こく風ふう土ど記きに載しされ。多おほ依い皆これ古こ義ぎに叶あへりと言いふ。猶なほ延えん曆りき年ねん中ちゆうに御おん撰えんび有ありし官くわん曹そう事じ類るいとて。三さん十じゅう卷まき有ありし由よしなるを初はじめに神祇じんぎ齋さい王わうの部ぶを載しさせ給たまひ。天てん長ちやう格かく抄せうと全おんく神祇じんぎを先まに舉あげ給たまひ。天てん滿まん宮きゆうの詔みことを奉ほうて撰えんび坐ませ依い類るい聚じゆ國こく史しも第一だいいちに神祇じんぎの部ぶを立たて賜たまひ。弘くわん仁にん貞てい觀くわん二に代だいの格かく式しき共ともに全おんく神祇じんぎの部ぶを先まに置おき給たまひしを。延えん喜ぎ式しきも其そのに因いん循じゆんし給たまふなりけり。凡まづて上じやう代だいより何なん事ごとも神祇じんぎ

祭まつり祀いの御事おんことをし。嚴げん重じゆうに爲なせ。給たまひし事こと是これより知し依い可かし。其その八はち卷まき目めは。諸しよの神かみ二にを祭まつらせ給たまふ時ときの祝詞のりとことば等を載のせられ。多おほ依いの第一だいいちに在あり。祈年としごひまつり祭まつりの祝詞のりとことばより。彌終いやそとに在あり。大祓おほそとぎの詞ことばまで。盡つくく天下あめのみしたの人民みたらひに爲なす。作なし給たまふ。神祭かみまつりの御文おんふみより。更さらに天皇てんわう御一ごいつ己この御祈おんいのより。非あらび。天下あめのみしたの事ことを祈いのり給たまふより。付つけて。御自おんみづからの御事おんことより。及および。依い御文おんふみに。玄そら道みち曰いふ。祝詞のりとことばを。故こ大おほ人ひと等らも。未いまだ甘あまく說せつ

得られざりしを伊吹屋大人の斷然として此  
と天津祝詞よて天皇祖神の御自ら御傳坐せ  
隊物な隊由開題記よ説明されて其釋等を古  
史傳よ神二の御傳の下よ論をれしを見隊可  
してさて其九卷目十卷目を神名帳として朝廷よ

聖御祭に有隊國二の神社に名帳なり此を延

喜式内の社と云ふ。猶此外よ國史よ所見多隊

御社の朝廷より祭らせ給ふも最多有り此を

官知の社と云ふ。未官知の社とて朝廷の

御祭りよ漏多隊社の數を今委くを尋ね知隊

べきよ非び其を各國の神階記よ載多隊社の

多きよ准へて思ふべく云三。玄道曰古と神祇

官記と云ふ。目所見多れむ。夫よ官知の社の事

など委く記されしと聞えしを今を絶て傳

らび。神階記と伴信友の集免しが十餘國有

しよ。猶鈴鹿氏が十餘國のを諸國より得多

と云へ。聖又一宮二宮三宮また總社など云ふ

事諸神の摠加階よ。凡て九度預り賜ひし事等  
と。信友の官社私考よ委く云へ。聖就て見はべ  
し。源親房卿の職原鈔よ。神祇官を第一よ舉  
て。當官を以て諸官の上よ置く事。是神國の風  
儀。天神地祇を重き隊故なりとも。祭官の職を。

上古の重任なり。又神國の故よ。當官を以て太  
政官の上よ置よ。と記され多依を。能も古の道  
を。書記傳へ多依文なり。玄道曰。岡白駒が説よ。  
國のみならび。周の世も然なりとて。小黠賢く  
云へれど。周禮の偽書を依と知らぬ。妄語よて。  
論ふよ。信よ此語の如き。神世の由緒。依の故  
足らび。天下を治免給ふ御政事よ。神事を先と爲給  
ふ事。即て皇產靈大神。天照大御神の。青人草を

愛み給ふ大御心を。御心と受行ひ給ふ。天皇命  
の御職よ御坐以故なり。と論をれしは。甚慇懃  
なふ誨語よて。凡て神國よ生を受依者を。本文  
よ在依如く。天津神國津神の御恩頼を。造次顛  
沛の間と忘れ奉依まじき。物よぞ在りけ依。さ  
て玉銚百首よ。日神の本つ御國と皇國はし。百  
八十國の秀國祖國よ。多天の下。國は多けど。神

魯岐の生成し坐せ依。大八洲國（相）よ（相）大名牟遲。  
少名御神の宜くも。修造固めし。大八洲國（相）また  
鈴屋集（相）よ。四方八面（相）よ。國を多けど。敷島の倭島  
根を八十の祖國（相）よ。百八十の國の祖國本つ  
國皇御國を尊きろ哉。とも詠れ多り。なほ此等の梗概は。  
余が白川殿（相）よ。記して上れば。伯家  
問答（相）よ。説ひつれむ。披き見は可し。  
腹を立物を苦（相）よ。依事。

神典（相）よ。八尋鉾長依日子命と申（相）よ。大神の我御  
心平明て。憤し（相）らびと。詔へ（相）依御語有（相）聖。此は  
御心（相）よ。腹立（相）しき事有（相）れどと。勉強（相）て堪忍（相）して  
怒り答（相）免賜（相）む。御情を平穩（相）よ。持せ給（相）ふ由に  
て。同典（相）よ。須佐之男命の御荒坐（相）し下（相）よ。天照大  
御神を恩親の御意（相）以て。答免給（相）む。恨み給（相）む  
に。容免給（相）ひて云（相）二と。在依（相）よ。全く寛仁大度の

御情の測り奉られて甚辱くれむ。此御誥は因  
て按ふ。大象經の損の卦。君子は忿を懲し  
慾を窒ぐと見え老子も善戰ふ者を怒らばと  
論さる。管子も憂悲喜怒をれむ道乃ち處無し  
と云ひ孔子も一朝の怒は其身を忘れて其親  
も及び。惑へ依り非ばやと樊遲を戒められき。  
常磐井嚴弋曰西洋人の説は人は禍災を前知  
す依り望最大不樂なふを無し故は天の至善

な依り深く將來の事を秘して人告げ然依り  
彗星・火球・狗吠・鴉鳴等を以て將來の災を表げ  
と云ふた天意は反くと云ふべしと此説可憐  
し幽師の説は贈池田瑞英に西洋人の説は  
或國は名醫有し其國人の甚く星家方相な  
どの説を信じて未來を恐怖し其神氣を惱し  
て禍を招く事を憐みて其妄説を除む事を論  
ふは國王を更なり臣民ともは其論ひを採用  
に彼醫深く思慮わて王は重き刑に當れ依り國  
人を乞ふて恐懼の能く神氣を亡し事を徴し  
試むと云へむ王其言を聞容て一人を與ふ依  
り醫師彼罪人に向ひて云けらく汝の罪甚重  
く首を斫依へきは決定れ依り王其甚く痛む  
事を憐みて我は汝の身體を痛め傷ふ事無く

して死しえむ事を命ぜられぬ我其方術を知  
れり針以て脈を刺し少く血を出さむ聊も  
痛苦を覺えびして死むと云ふ囚人拜み謝  
して痛む事無く心をやむじて死し就むと  
云ふ醫乃ち布以て其眼を掩ひ其臂を出し  
芒針を以て少の刺し創付ばま血を出さば  
別に竊に陶器を用ひて底に穴一つ穿ちて其  
中に水を盛て穴より出し此を椀に受しめ偽  
りて聲を發し血既より出初多り人の身を血十  
斤のみ如此く出ばこと十椀に迄らむ死せむ  
と云ひて一椀毎に其數を云しむ囚人其水の  
聲を聞きまた其數を云ふを聞いて信は血の出  
はと思ひ漸く衰へ弱りて十椀の聲を聞く  
よ迄りて果して死多り諸亡骸を見は少し

も傷ふ所無し國王始めて彼醫の説を眞實の  
理論よして懼怖の能く精神を亡以事を知る  
わと見え侍り又大河内某と云ひし人も名  
負ふ猛き武士よて朝鮮の役よ彼國よて擧  
動りし事等書記せ依物の中よ五寸七寸許の  
切疵を負依こと數知らば太股より腹の邊よ  
鐵炮玉を受多依事を任有正しあど皆自然よ  
瘡えけ依の中よ一つ頭甲を逃りて腦よ撃込  
れ多依玉を抜ぎて其疵痊え合ひ多れむ世に  
限り頭よ其玉の籠有依任に百歳の齡ひを越  
して老死多りしと云ひま多其言よも人其身  
よ鐵炮玉を受け疵を受れど死やせらむと惶  
懼して精神を消散せ依故よ死ぬるなり其  
怖れ多よ無れど死ぬる物よ非びと常に言へ



れと聞傳へ侍り。また西洋人の説も頭腦を神  
經に命を依本所なれど此所も少も疵付て  
決めて生依道理無しと言依を其方の物學問  
ま依徒など甚く誇れど彼より早く内經も頭  
を諸陽の會と云ひ仲景翁の説も頭を身の  
元首人神に住む所氣血精明三百六十五經皆  
頭を歸す頭を諸陽の會なりと説くは  
て曰く甚く中記引出たるを經に見えしと在り  
て最大切は所れる其腦中よ彼玉を受て  
だよ勇み猛き人そ精神を失たれば多市中な  
どよ見依犬の多有依中よ脊骨を切られ或そ  
脊骨切放多れて腸胃を引つ有も多きを見  
侍依よ此そ勇氣の故よそ非ざれど死てふ事  
を知らば但痛みを憂ふ依迄よて死を怖依

思ひの无き故ならむと思たれ侍わしとも有至  
嚴戈按よ此言等實よ信べし廣成子も多知  
そ敗れを爲すと云わ養性の士知らざ依可け  
むや可憐此嚴戈と云わ養性の士知らざ依可け  
依は神の身を死せよと云わ養性の士知らざ依可け  
一法有ち何れを取出て忘れ形見置く堪よへなむ  
家分量記ちふ物よ腹立時を明れ依智も暗く  
民

成至善心も悪く成り調ふ事と破れ君臣父子  
夫婦兄弟朋友の中も破れ咎と云ふ咎是よ至

起<sup>たこ</sup>。家<sup>けん</sup>。堪<sup>ん</sup>。忍<sup>にん</sup>の成<sup>な</sup>らぬを氣<sup>き</sup>隨<sup>ずい</sup>故<sup>こ</sup>れり。主<sup>しゅ</sup>君<sup>くん</sup>の前<sup>まへ</sup>に  
ては。腹<sup>はら</sup>と立<sup>たて</sup>られれば。親<sup>おや</sup>の前<sup>まへ</sup>より。腹<sup>はら</sup>を立<sup>た</sup>て  
て知<sup>し</sup>。家<sup>けん</sup>可<sup>べ</sup>し。覺<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>有<sup>あ</sup>。家<sup>けん</sup>灸<sup>きう</sup>を忍<sup>にん</sup>へ。覺<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>無<sup>な</sup>れむ。互<sup>あ</sup>  
火<sup>び</sup>も驚<sup>おどろ</sup>くれり。少<sup>すく</sup>と云<sup>い</sup>ひ。■ 鑒<sup>かん</sup>。異<sup>い</sup>國<sup>こく</sup>本<sup>ほん</sup>朝<sup>てう</sup>は古<sup>ふる</sup>  
き物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>も。短<sup>たん</sup>慮<sup>りよ</sup>よて功<sup>こう</sup>を成<sup>な</sup>せ。家<sup>けん</sup>事<sup>じ</sup>无<sup>な</sup>し。元<sup>げん</sup>來<sup>らい</sup>  
胸<sup>きょう</sup>中<sup>ちゆう</sup>の挾<sup>せま</sup>き故<sup>ゆゑ</sup>。短<sup>たん</sup>慮<sup>りよ</sup>れり。と意<sup>い</sup>得<sup>え</sup>て。常<sup>つね</sup>二<sup>に</sup>心<sup>しん</sup>を  
寛<sup>かん</sup>。行<sup>かう</sup>ひ習<sup>じゆ</sup>を以<sup>も</sup>べし。大<sup>おほ</sup>田<sup>たの</sup>道<sup>だう</sup>灌<sup>くわん</sup>の歌<sup>うた</sup>。短<sup>たん</sup>慮<sup>りよ</sup>功<sup>こう</sup>

を成<sup>な</sup>べと云<sup>い</sup>ふ意<sup>い</sup>を。急<sup>いそ</sup>びむ。濡<sup>ぬ</sup>ざらましを。旅<sup>たび</sup>人<sup>びと</sup>  
の跡<sup>あと</sup>より晴<sup>はる</sup>涼<sup>りやう</sup>。野<sup>の</sup>路<sup>ぢ</sup>の村<sup>むら</sup>雨<sup>あめ</sup>。又<sup>また</sup>或<sup>ある</sup>歌<sup>うた</sup>。武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>の矢<sup>や</sup>  
走<sup>たせ</sup>の渡<sup>わた</sup>り。近<sup>ちか</sup>くとも。急<sup>いそ</sup>むを廻<sup>ま</sup>れ。勢<sup>せ</sup>田<sup>た</sup>は長<sup>なが</sup>橋<sup>はし</sup>と  
在<sup>ある</sup>を引<sup>ひ</sup>鉦<sup>あつ</sup>し。貝<sup>かい</sup>原<sup>げん</sup>篤<sup>あつ</sup>信<sup>しん</sup>も右<sup>みぎ</sup>の易<sup>やく</sup>語<sup>ご</sup>を引<sup>ひ</sup>て。凡<sup>まづ</sup>て  
萬<sup>よろづ</sup>の惡<sup>あく</sup>を。多<sup>おほ</sup>くを忿<sup>いかり</sup>と怒<sup>おこ</sup>り。起<sup>た</sup>。家<sup>けん</sup>七<sup>しち</sup>情<sup>じやう</sup>の内<sup>うち</sup>二<sup>に</sup>  
の者<sup>もの</sup>尤<sup>もとも</sup>害<sup>がい</sup>多<sup>おほ</sup>し。我<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>を傷<sup>や</sup>ひ。人<sup>ひと</sup>を傷<sup>や</sup>ふ。恐<sup>おそ</sup>はべし。  
又<sup>また</sup>此<sup>この</sup>二<sup>ふたつ</sup>を。養<sup>やう</sup>生<sup>じやう</sup>の道<sup>みち</sup>。甚<sup>せい</sup>害<sup>がい</sup>有<sup>あ</sup>とも。心<sup>こころ</sup>は天<sup>てん</sup>君<sup>くん</sup>よ

て身の主なり。常に令樂むべし。令苦むべし。ら  
ば。我身貧賤よしして。或も不意の禍ひ有らとも。  
是天命なれど。憂ふべし。らば。樂みを失ふべし。  
らば。と母人の心平生無事の時。常に樂み  
多けれど。如何なれば。禍ひ出來ても。苦まば。譬へ  
ど。富家人を。凶年よ遇ても。饑び。血氣強き人。  
激烈き寒暑よ中ても。感ぜざれば。如し。とも云

聖。良齋間話よ。怒を逆徳な。故事を説いて。劉  
寛の熱羹よ。驚らば。牛弘射牛を問ひ。韓琦の  
燃鬚は。神色を變ぜば。呂東萊の躬自ら厚くし  
て。薄く人を責む。の章を讀て。卞急の氣質を變  
ざるの類。皆後人の模。大象經に。水天上に在る  
範と云べし。と云へり。大象經に。水天上に在る  
需れり。君子を飲食宴樂に。見え。廣成子の吾  
を其一を守て。其和は處依。と云依語を。上の  
神語よ。比考へて。心神を和し。樂し免。腹立まじ  
く。勢免行ふべき物ぞ。らし。おる。仙家にては。一

向むかふ爲なむこと行たふこと。悉ことごとく面白おもくして。愁うれ憂たく困くる苦し思おもふ事こと。更さらふ元なき由よしに聞き持もち多おほく隊たいをも。此こは思おもひ合あひべくれむ。此この件くだを專もら已おのの心こころを治をさす事を論ことさしと所みえ見み多おほす。

已おのが慢まん心しんよて。人ひとを見下みくだす事こと。

古こ今きん集しの序じよは得え多おほる處ところ得えぬ處ところ互たがひに恥はむ有あは  
と言いひ漢かん人じんも人ひとは能のう有あり不ふ能のう有あると云いへば

如ごとく誰たれしも各おの得失とくしつ長ちやう短たん有あは物ものよて。或ある御み門かどの  
如何いかなる愚ぐ人じん。多おほく拙つたき者ものと云いども。必かならず一ひとの  
得えて手てを在あは物ものなれむ。其その才さいの隨まは使つかふべしと  
詔のたまひしを。實じつは難ありがた御おん語ことにて。凡たゞ人びとの少せうし物もの  
を學まべ得え多おほりとて。世よ人びとを人ひととも思おもはむ。箴な如み  
をるを。上かみを神じん祇ぎの御み心こころよも叶かはむ。下しもを衆しゆ人じん  
の怨み惡あくの歸よりて。心こころに禍わざ害がいを免まれ得えぬこと。和わ漢かん

古今<sup>ここん</sup>其<sup>その</sup>例<sup>あて</sup>數<sup>すう</sup>多有<sup>あ</sup>て。今<sup>いま</sup>數<sup>う</sup>ふ依<sup>よ</sup>らば<sup>ば</sup>。追<sup>いと</sup>あらば<sup>ば</sup>。  
さて天地<sup>あめつち</sup>を造成<sup>つく</sup>り給<sup>たま</sup>ひし。天皇<sup>あまみつみ</sup>祖<sup>た</sup>神<sup>かみ</sup>等<sup>ら</sup>さへよ。  
大事<sup>たほごと</sup>有<sup>あ</sup>依<sup>よ</sup>時<sup>とき</sup>を。八<sup>や</sup>百<sup>ひゃく</sup>萬<sup>まん</sup>神<sup>かみ</sup>等<sup>ら</sup>を。神<sup>かみ</sup>集<sup>あ</sup>り集<sup>あ</sup>給<sup>たま</sup>ひて。  
神<sup>かみ</sup>議<sup>ぎ</sup>を議<sup>ぎ</sup>給<sup>たま</sup>へ依<sup>よ</sup>由<sup>よし</sup>大<sup>おほ</sup>祓<sup>はら</sup>の詞<sup>ことば</sup>に。最<sup>い</sup>第<sup>ち</sup>一<sup>いち</sup>よ見<sup>み</sup>  
え。おゑ大<sup>たほ</sup>御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>と決<sup>さだ</sup>難<sup>め</sup>ね給<sup>たま</sup>ひし時<sup>とき</sup>を。太<sup>ふと</sup>非<sup>まよ</sup>のト  
事<sup>こと</sup>を以<sup>も</sup>て決<sup>さだ</sup>定<sup>め</sup>給<sup>たま</sup>ひし事<sup>こと</sup>を。も察<sup>たも</sup>奉<sup>た</sup>まへべく。漢<sup>から</sup>國<sup>くに</sup>  
よて聖<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>ちふ人<sup>ひと</sup>の稱<sup>かしら</sup>首<sup>う</sup>よ爲<sup>な</sup>る依<sup>よ</sup>。堯<sup>ぎやう</sup>舜<sup>しゆん</sup>禹<sup>う</sup>等<sup>ら</sup>も。

大事<sup>たいじ</sup>は。皆<sup>みな</sup>衆<sup>しゆ</sup>人<sup>じん</sup>を。集<sup>あつ</sup>めて議<sup>ぎ</sup>り行<sup>た</sup>ひ。且<sup>かつ</sup>禹<sup>う</sup>も自<sup>みづか</sup>ら功<sup>こう</sup>  
を誇<sup>ほこ</sup>らざ依<sup>よ</sup>を以<sup>も</sup>て。良<sup>か</sup>行<sup>やうかう</sup>とせし。非<sup>あら</sup>ざる。是<sup>こゝ</sup>を  
以<sup>も</sup>て。老<sup>らう</sup>子<sup>し</sup>よ。上<sup>じやう</sup>善<sup>せん</sup>を水<sup>みづ</sup>の如<sup>ごと</sup>し。水<sup>みづ</sup>を善<sup>よ</sup>く萬<sup>まん</sup>物<sup>もつ</sup>を  
和<sup>くわ</sup>して争<sup>せう</sup>はむ。衆<sup>しゆ</sup>人<sup>じん</sup>の惡<sup>あく</sup>む所<sup>ところ</sup>よ處<sup>き</sup>依<sup>よ</sup>。故<sup>ゆゑ</sup>よ道<sup>みち</sup>よ  
樂<sup>たの</sup>しむ。敢<sup>あへ</sup>て天<sup>てん</sup>下<sup>か</sup>の先<sup>ま</sup>たらば。とも。富<sup>ふ</sup>貴<sup>き</sup>よし  
て驕<sup>たご</sup>れを自<sup>みづか</sup>ら其<sup>その</sup>咎<sup>とが</sup>を遺<sup>のこ</sup>はとも。聰<sup>そう</sup>明<sup>めい</sup>深<sup>しん</sup>察<sup>さつ</sup>よし  
て。死<sup>し</sup>よ近<sup>ちか</sup>く者<sup>もの</sup>を。好<sup>この</sup>て人<sup>ひと</sup>を議<sup>ぎ</sup>を依<sup>よ</sup>者<sup>もの</sup>れ。博<sup>たく</sup>辨<sup>べん</sup>

廣大くわうだいたいにして其身そのみを危あやむくはよめ者ひとは人の惡あくを發あは  
く者ものなり。と見え。大象たいざう經きやうも。虚こゝろにして人ひと  
受うく。多おほ行ぎやうひ恭きやうよ過すまぐ。とも云いひ。孔子くしと温良わんりやう  
恭儉讓きやうけんじやうを良よき事こととし。大おほきぬるのれ河海かうかいや。是  
よ下くだれむなり。とも慮たもひりて人ひとよ下くだはとも。如もし  
周しう公こうの才さいは美有びありとも。驕たご且かつ吝やんならしむ。を。  
其餘そのよを觀みよ足たちざはみふとも。多おほ易えきの彖傳たんてんよ。

天道てんたうを盈みつはを虧かぎて謙けんを益まひ。地道ちたうを盈みつはを變へん  
じて謙けんよ流しき。鬼神きしんを盈みつはを害がいして謙けんに福さきえひ  
まひとも。日ちゆう中ちゆうまればがたふ是つく。月つき盈みつればしよく食てんひ。天地てんちの  
盈えい虚きよ時ときと與ともよ消せう息そくひ。而しりはを况いたむや人ひとよ於たきてを  
ややとも。申しん子しと。人ひとよ餘あま有あるを示しめひ者ものを。人之ひとこれ  
を奪うばふ。人ひとよ足たちざはを示しめひ者ものは。人之ひとこれよ與あふと  
と云いひて。皆みな謙讓けんじやうの道みちを教をへる。井澤長秀いざのながひでの

語<sup>ご</sup>も侍<sup>さむらひ</sup>ひ多<sup>おほ</sup>らむ者<sup>もの</sup>を人<sup>ひと</sup>を侮<sup>あはれ</sup>はべ<sup>ら</sup>らび。禮<sup>れい</sup>讓<sup>じやう</sup>  
謙<sup>けん</sup>退<sup>たい</sup>まべし。人<sup>ひと</sup>を時<sup>とき</sup>の幸<sup>かう</sup>不幸<sup>ふかう</sup>よて。榮<sup>さか</sup>はも衰<sup>おとろ</sup>は  
も在<sup>あ</sup>り。大<sup>だい</sup>身<sup>しん</sup>と小<sup>せう</sup>身<sup>しん</sup>も在<sup>あ</sup>り。然<sup>しか</sup>は己<sup>おのれ</sup>も權<sup>いき</sup>威<sup>ひ</sup>有<sup>あ</sup>  
る。とて人<sup>ひと</sup>を蔑<sup>さ</sup>如<sup>か</sup>し見<sup>み</sup>下<sup>くだ</sup>はべ<sup>ら</sup>らむ。又<sup>また</sup>謙<sup>けん</sup>まし  
て誇<sup>ほこ</sup>はべ<sup>ら</sup>らび。凡<sup>もろ</sup>て天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>の間<sup>あひだ</sup>に所<sup>あち</sup>有<sup>ちや</sup>は事<sup>こと</sup>物<sup>ぶつ</sup>  
の道<sup>だう</sup>理<sup>り</sup>。一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>よて兼<sup>かね</sup>備<sup>そめ</sup>へ多<sup>おほ</sup>る者<sup>もの</sup>无<sup>な</sup>し。我<sup>わが</sup>知<sup>し</sup>らぬ  
事<sup>こと</sup>を他<sup>ひと</sup>に習<sup>なら</sup>ひ。我<sup>わが</sup>覺<sup>おぼ</sup>えたは事<sup>こと</sup>を他<sup>ひと</sup>に教<sup>をし</sup>ふ

べしとて。登<sup>とう</sup>蓮<sup>れん</sup>法<sup>ぽう</sup>師<sup>し</sup>の事<sup>こと</sup>を引<sup>ひ</sup>きたり。下<sup>しも</sup>條<sup>じょう</sup>に説<sup>い</sup>ふ  
さへは。各<sup>おの</sup>其<sup>その</sup>御<sup>おん</sup>靈<sup>りやう</sup>德<sup>とく</sup>を持<sup>もち</sup>別<sup>べつ</sup>賜<sup>たま</sup>ひ彼<sup>かの</sup>仙<sup>せん</sup>真<sup>しん</sup>等<sup>たう</sup>も互<sup>たが</sup>  
に其<sup>その</sup>能<sup>のう</sup>と不<sup>ふ</sup>能<sup>のう</sup>を温<sup>あたた</sup>ねつ。佐<sup>たす</sup>け合<sup>あ</sup>ひ賜<sup>たま</sup>ふ由<sup>よし</sup>。仙<sup>せん</sup>  
境<sup>きやう</sup>異<sup>い</sup>聞<sup>もん</sup>は見<sup>み</sup>え。孔<sup>こう</sup>子<sup>し</sup>の門<sup>もん</sup>に四<sup>し</sup>科<sup>か</sup>を立<sup>た</sup>て。漢<sup>かん</sup>の高<sup>かう</sup>  
祖<sup>そ</sup>が三<sup>さん</sup>傑<sup>けつ</sup>も各<sup>おの</sup>其<sup>その</sup>長<sup>ちやう</sup>を所<sup>しよ</sup>有<sup>う</sup>に如<sup>ごと</sup>く。一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>は兼<sup>かね</sup>  
く飛<sup>と</sup>び。獸<sup>けつ</sup>も能<sup>よ</sup>く趨<sup>たす</sup>はば長<sup>ちやう</sup>せし。如<sup>ごと</sup>く。一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>は兼<sup>かね</sup>  
備<sup>そめ</sup>は。最<sup>いと</sup>難<sup>かた</sup>き事<sup>こと</sup>知<sup>し</sup>はべし。又<sup>また</sup>人<sup>ひと</sup>を器<sup>き</sup>使<sup>し</sup>むる心<sup>こころ</sup>  
捉<sup>と</sup>む。淮<sup>たい</sup>南<sup>なん</sup>子<sup>し</sup>。呉<sup>ご</sup>子<sup>し</sup>等<sup>たう</sup>は説<sup>と</sup>はべし。殊<sup>こと</sup>は兵<sup>へい</sup>學<sup>がく</sup>者<sup>しや</sup>を此<sup>こゝ</sup>  
を知<sup>し</sup>らば。在<sup>あ</sup>はべ<sup>ら</sup>らむ。其<sup>その</sup>は別<sup>べつ</sup>に委<sup>く</sup>曲<sup>せき</sup>く。世<sup>よ</sup>  
在<sup>あ</sup>は。實<sup>じつ</sup>は己<sup>おのれ</sup>の慢<sup>まん</sup>心<sup>しん</sup>を起<sup>た</sup>して。人<sup>ひと</sup>を輕<sup>あは</sup>慢<sup>げん</sup>は。神<sup>しん</sup>  
祇<sup>み</sup>も疎<sup>そ</sup>れ奉<sup>まつ</sup>り。諸<sup>しよ</sup>人<sup>にん</sup>よと惡<sup>あく</sup>は儀<sup>ぎ</sup>にて。己<sup>おのれ</sup>の

徳を傷ひ身又家をも失ふ本基れれど。斯有依  
戒免は有依な依可し。

人の悪を見て已よ悪心を増す事。

上代の御教訓よ。我御世に事能くこそ神習へ。

又顯しき青人草習へや。ちふ語有至。此を凡て

人と生れし者は。正き皇大神等の御功德及其

御行ひをこそ。能く習ひ學ぶべき物ぞ。勤め凡

人の上を習ふべのらむと。此言にて。本學よ仕

奉依徒を。旦夕服膺して。造次顛沛の間も。此語

を事として。忘依可きに非び。老子よ。善人を不

善人の師不善人は善人の資と有依と。善人の

善行を習ふを勿論よて。其善らざ依人を見て

は。己の身れ上よも。斯有依事等の有もやせむ

と。日ニよ省みて。謹免を。不善人さへも。即ち我



師と成はとれり。孔子と此等の師言は法りて。  
三人行ば。必ば我師有。其善き者を擇て之に  
從ひ其善らぬ者も。之を改むとも。賢を見ては。  
齋らむ事を思ひ。不賢を見ては。内より自ら省  
察と云ひ。大象經は。善を見ては必ば遷は惡  
を見ては必ば改むと有は。孔子も過てむ  
改むは憚ること勿れとも。義を聞て徒は能

む。不善改は能むざるは。是我憂ひなりと母。  
顔淵を褒て。不善を知らざること無く。知正て  
改めざること無しとも云ひて。不善を改免て。  
善行を爲すべき由を。數多教へ多り。楠正成卿  
の戒は。善を作とも。身の爲に作は。身の爲に作  
む。善は似て惡れりとも。まゝ全正行朝臣は遺  
訓は。臣を仁愛を以て使ふ可し。人を捨はこ

と勿れ。人よ上るは者。愛憐の心無くては。人思  
ひ付じ。思ひ付ぎ。國治らび。國治らねむ。君へ  
の不忠。之は過び。名將。其人を用ふは。良匠の  
材を用ふは。如しとも。又故判官殿を。臣をば  
使と思ふべ。らび頼むと思へ。仰せられし  
なりとも。有聖。此大人等。所謂道理。心肝を貫  
き。忠義骨髓。填つち。臣に坐せむ。僅に。魚は

語なれども。吾人の教父と成べく。甚偉慶く  
れむ。凡て天皇。祖神を。仁慈を以て。人間萬物を  
し。在れむ。其造化。頼て。生し。出る。人ち。ふ。人。を  
其。御心を。御心として。六親を。更れ。天。地。間。の  
身。獸。蟲。魚。及。び。萬物。至。家。まで。仁。愛。を。施。して。  
善。行。を。爲。流。を。天。神。地。祇。共。に。感。賞。賜。ひ。觀。喜。賜。  
ふ。こと。と。神。典。に。動。ぬ。左。契。有。り。て。玄。家。を。更。れ。り。  
儒。家。佛。氏。及。び。他。の。百。家。と。云。ども。皆。識。ら。び。知。  
ら。び。其。御。教。訓。の。範。圍。を。出。は。こと。能。を。ぎ。は。事。  
已。の。神。典。の。私。記。を。委。曲。く。載。せ。は。を。見。依。べ。し。  
武。士。訓。に。只。人。を。善。を。日。に。爲。さ。む。こと。を。思

ふべし。是を少しき善なれむ。為に足らばと  
 て止依こと勿れ。是を少しき悪なれば。苦し  
 らむとて為にこと勿れ。凡て俗人を。他の善を  
 手本とせばして。他の悪を手本とほむれば。善  
 人有れむ。其如く。善を爲さむと。思ふ心を无  
 くして。種ニよ譏謗て。悪人と言ひ爲になり。悪  
 人有れむ。彼を是程の悪を爲し多れども。一生

善無し。我は未だ夫程ハ無し。容易く通依べ  
 しなど。私に許可を出ひなり。是故に。古人と  
 心の師とを成れ。心を師と爲依こと勿れと云  
 へりとも。又人に交依。他の善をみを擧て。他  
 の悪を言ざれ。我不善を改めて。他の不善を答  
 むべらば。凡て他の事を云ふ者を。身の上は  
 曾て知ざる者なり。張南軒の語に。人を論むる

よエみな依者よりのを己おのれを察み依よこと常つね疎うとし。と云い  
依よをも思おもふべし。叔鈴屋集しゅしんやのしよ。漢土かんちくよの人ひと習ならを免まぬ  
や。神國かみくにの人ひとを正直まなほし。神習かみならふべし。と詠よれしを  
能思よくおもひて。勤ゆめ惡人あくまの行なひを聞習きなふべきなり非あら  
ぞ。我天津神國津神わがあまつかみくにつかみの御道おんみちをこそ。正ただく直ただく履ふ  
行なふべき者ものなれ。さて世よを荒振あらかぶ禍わざ神かみも數かず知し  
を妨さまたげ人じん心しんをして漫まよ凶惡まがよ遷うつを事こと有あは由よし  
古史傳こしでん及びおよび仙境異聞せんきやういぶんよ見みえつれば。漢人かんじんも一いち

念ねんの善ぜん善ぜん神じん之これも隨したがひ。一念いちねんの惡あく惡あく神じん之これも隨したがふ  
と云いふ如ごとく。實じつは恐おそいふべき者ものよ。心こゝろ在あはれむ。先まづ風ふう  
く惟ただ神かみの道みちは神習かみならひ。其その魂たまを鎮しづめ。眞ま木き柱むす太ふとく  
堅うたく。心こゝろ神かみを築つ立たて固かためて。横よこさの道みちに惑まどふこと无な  
く。大直おほなほ日ひ神かみの大御德おほみいつ  
を請こひ祈の申まをいべくこそ。

無病むびやうの時とき家業怠げふたの事こと。

恐懼おそけど。朝廷てうていよ立たして。大前おほまへ近ちかく仕奉つかへまつて給たまふ。  
王公貴人わうこうきじんを申まをいと勿論さちよて。天下てんかの士農工商しのうきうしやう  
よ至いたはまで。各おの其家業職分おのしよくふん無なき人ひとを在あはれこと

無れど。強め勵みで能行ふべしとの語れ。彼天津御神地津御神の御恩澤を甚も奇ニ妙ニ。高く貴き不可思議の依者に坐て。天地の初發の時より。今日に至依まで。兩間在り。有依萬物を生ニ化ニし給ひて。一事一物として其御靈徳。漏依。こと無き御事を。一朝一夕。説盡はべくと在ねど。其を姑く閑きて。聊

の全豹の一斑を申さむに倭姫命と申し垂仁天皇の皇女也。日本武尊。神劔を授賜ひし時に。慎みて莫怠り。と詔へ依御教誨有り。此皇女也。天照大御神の託坐し由にて。現世。五百歳餘も大坐おして。神聖とも神聖と坐々も。其御口自ら傳坐依詔よて。凡て人の行を敬慎。因て齊ひ。勉彊。因て成就。依ことを。誨語賜へ

物と。可<sup>うしこ</sup>恐<sup>おそ</sup>けれど。察<sup>しつ</sup>奉<sup>たてまつ</sup>らるゝに付<sup>つき</sup>て。按<sup>おさ</sup>ふよ。  
大<sup>だい</sup>象<sup>じやう</sup>經<sup>きやう</sup>よ。天<sup>てん</sup>行<sup>かう</sup>を。乾<sup>けん</sup>ぬめ。君<sup>くん</sup>子<sup>し</sup>を。自<sup>みづか</sup>ら。強<sup>つとめ</sup>て。息<sup>やま</sup>ぶ  
と見<sup>み</sup>え。老<sup>らう</sup>子<sup>し</sup>よ。強<sup>つとめ</sup>行<sup>たう</sup>ふ者<sup>もの</sup>を。志<sup>まんざ</sup>し。有<sup>あ</sup>聖<sup>せい</sup>と云<sup>い</sup>ひ。孔<sup>こう</sup>  
子<sup>し</sup>も。此<sup>こゝ</sup>等<sup>ちやう</sup>の語<sup>ご</sup>を。師<sup>し</sup>として。逝<sup>ゆく</sup>者<sup>もの</sup>を。斯<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>き。の。  
晝<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>を。舍<sup>まて</sup>む。と言<sup>い</sup>へ。依<sup>てい</sup>程<sup>ちやう</sup>注<sup>ちゆう</sup>よ。此<sup>こゝ</sup>を。道<sup>みち</sup>體<sup>たい</sup>ぬめ。天<sup>てん</sup>  
運<sup>めぐり</sup>て。已<sup>やま</sup>ば。日<sup>ひ</sup>往<sup>ゆけ</sup>む。月<sup>つき</sup>來<sup>きた</sup>依<sup>さむ</sup>寒<sup>さむ</sup>往<sup>ゆけ</sup>む。暑<sup>あつ</sup>來<sup>きた</sup>依<sup>さむ</sup>水<sup>みづ</sup>流<sup>ながれ</sup>て  
息<sup>やま</sup>ぶ。物<sup>もの</sup>生<sup>な</sup>じて。窮<sup>きゆう</sup>らば。皆<sup>みな</sup>道<sup>みち</sup>と。與<sup>とも</sup>に。體<sup>たい</sup>を。爲<sup>な</sup>す。晝<sup>ちゆう</sup>

夜<sup>や</sup>よ。運<sup>めぐり</sup>て。未<sup>いま</sup>だ。嘗<sup>かつ</sup>て。已<sup>やま</sup>ば。是<sup>こゝ</sup>を。以<sup>も</sup>て。君<sup>くん</sup>子<sup>し</sup>を。之<sup>これ</sup>に。  
法<sup>ほふ</sup>聖<sup>せい</sup>。自<sup>みづか</sup>ら。強<sup>つとめ</sup>て。息<sup>やま</sup>ぶ。其<sup>その</sup>至<sup>いた</sup>れ。依<sup>たよ</sup>が。及<sup>およ</sup>て。や。純<sup>じゆん</sup>よし。  
て。亦<sup>また</sup>。已<sup>やま</sup>ば。とも。見<sup>み</sup>え。管<sup>くわん</sup>子<sup>し</sup>よ。之<sup>これ</sup>を。思<sup>おも</sup>へ。之<sup>これ</sup>を。思<sup>おも</sup>ふ。  
て。得<sup>え</sup>ざれど。鬼<sup>き</sup>神<sup>しん</sup>之<sup>これ</sup>を。教<sup>を</sup>ゆ。鬼<sup>き</sup>神<sup>しん</sup>の。力<sup>ちから</sup>よ。非<sup>あや</sup>む。其<sup>その</sup>  
精<sup>せい</sup>氣<sup>き</sup>の。極<sup>きやく</sup>ぬめ。とも。中<sup>ちゆう</sup>庸<sup>ゆう</sup>よ。人<sup>ひと</sup>一<sup>ひと</sup>多<sup>た</sup>びよ。して。之<sup>これ</sup>  
を。能<sup>よく</sup>されむ。已<sup>これ</sup>之<sup>これ</sup>を。百<sup>も</sup>多<sup>た</sup>びも。人<sup>ひと</sup>十<sup>じゆ</sup>たびよ。して。  
之<sup>これ</sup>を。能<sup>よく</sup>されむ。已<sup>これ</sup>之<sup>これ</sup>を。千<sup>ち</sup>たびも。果<sup>た</sup>して。此<sup>こゝ</sup>道<sup>みち</sup>を。

能よくまれば愚れ聖と雖いも必かならず明あきられり。柔やそなりと  
 雖いも必かならず強つよし。とも言いひ。禹うの天下てんの洪水こうを治をさ  
 し時ときは。手て足あし胼胝あかを生しじ。姫旦きたんが吐と哺ほ握あ髮くして。  
 天下てんの士しを待まちち。まゝ坐まして旦あしたを待まちし事こと。及および  
 孔子こうしの道みちを行たむとて。七しち十二じふ國こくを周し流りし。晚ばんに  
 易やくを讀よみ。韋編ゐへん三絶さんぜつを見みてと。皆みな太いたく勉つと彊め  
 し事ことを思おもふべし。楚辭そに善ぜんを外ほ由よ聖せい來きたらば名な  
た虚あく作なべのらば孰たれ孰たれの施ほし

無なくして報はい有あむ。孰たれ實まらむして獲うれ。事ことに  
 有あむと云いへば。俗よに蒔まり種たねを生ぬと言ふに  
 全たく。勞ろう苦くせむして得うれ。事ことの无なきを戒いまし語ごと  
 聞きゆ。さして小せう技ぎ雜ざ藝ぎと云いへば。勞ろう勤きんせむ。其その妙めう  
 を窮きう極ごくは。得え難がたきを。況まし已たれを治をさめ。人ひとを治をさむ  
 道みちに於おきて。をや。況ましや顯けん幽ゆう無む敵てきの。大だい道だうに於おて  
 をや。豈あ其その困こん勉べん。貝原篤信かいげんあつしんの説せつに。古語こごに人生じんせいは  
 せざい。可べ可べむや。勤つとむれむ。匱けいらむと。言いへ。勤つとむ。利りの  
 勤つとむ。在ある。勤つとむ。れむ。匱けいらむと。言いへ。勤つとむ。利りの  
 本もとなり。農のうの田たを作つくりて。五穀ごこくを多たく得うれ。も。工こう  
 匠たくみを營いみ。商しやうの賈あひて。利りを得うれ。も。皆みな勤つとむ。聖せい

爲<sup>し</sup>出<sup>だ</sup>を利<sup>り</sup>なり。士<sup>し</sup>を佞<sup>ねい</sup>巧<sup>こう</sup>を以<sup>も</sup>て。諂<sup>へん</sup>をざれども。  
惟<sup>た</sup>忠<sup>ちゆう</sup>勤<sup>きん</sup>をたよ。專<sup>せん</sup>一<sup>いち</sup>よまれむ。求<sup>もと</sup>免<sup>めん</sup>ばれむ。母<sup>きみ</sup>君<sup>きみ</sup>  
の寵<sup>ちゆう</sup>有<sup>あ</sup>りて。祿<sup>ろく</sup>を得<sup>え</sup>幸<sup>さい</sup>ひを得<sup>う</sup>はなり。月<sup>げつ</sup>今<sup>こん</sup>廣<sup>くわう</sup>義<sup>ぎ</sup>  
よ。一<sup>いつ</sup>身<sup>しん</sup>の計<sup>けい</sup>は勤<sup>つとめ</sup>よ在<sup>あ</sup>りて云<sup>い</sup>ひ。古<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>を人<sup>ひと</sup>の朝<sup>あさ</sup>  
早く起<sup>お</sup>はと。晚<sup>わん</sup>く起<sup>お</sup>はとを以<sup>も</sup>て。家<sup>いへ</sup>を興<sup>こう</sup>廢<sup>たい</sup>を知<sup>し</sup>  
はと云<sup>い</sup>へ。凡<sup>まづ</sup>て善<sup>ぜん</sup>を務<sup>つとめ</sup>て。怠<sup>おこ</sup>らばはを良<sup>りやう</sup>士<sup>し</sup>と比<sup>ひ</sup>。  
必<sup>かなら</sup>ず家<sup>いへ</sup>を興<sup>おこ</sup>す。家<sup>いへ</sup>業<sup>ごう</sup>を務<sup>つとめ</sup>て。怠<sup>おこ</sup>らざるを良<sup>りやう</sup>民<sup>みん</sup>と

ま。必<sup>かなら</sup>ず富<sup>と</sup>む。まゝ晋<sup>しん</sup>の王<sup>わう</sup>凝<sup>きやう</sup>る。家<sup>いへ</sup>を治<sup>をさ</sup>むはよ。四<sup>よつ</sup>  
教<sup>を</sup>有<sup>あ</sup>り。一<sup>いつ</sup>よを。家<sup>いへ</sup>業<sup>ごう</sup>を勤<sup>つとめ</sup>て。生<sup>せい</sup>業<sup>ごう</sup>を治<sup>をさ</sup>む。二<sup>ふた</sup>よを。  
儉<sup>けん</sup>約<sup>やく</sup>にして。財<sup>ざい</sup>用<sup>よう</sup>を足<sup>た</sup>り。三<sup>みつ</sup>よを。謹<sup>つし</sup>みて。我<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>を  
保<sup>たも</sup>つ。四<sup>よつ</sup>よは。怒<sup>おこ</sup>りして。人<sup>ひと</sup>を愛<sup>あい</sup>ひ。と言<sup>い</sup>へ。は事<sup>こと</sup>も  
見<sup>み</sup>ゆ。此<sup>これ</sup>等<sup>ちゆう</sup>彼<sup>かの</sup>御<sup>ご</sup>教<sup>けう</sup>語<sup>ご</sup>の旨<sup>むね</sup>よ。能<sup>よ</sup>く協<sup>くわい</sup>へ。は言<sup>こと</sup>なれ  
む。引<sup>ひ</sup>出<sup>いで</sup>つ。はれり。さて。杉<sup>まぎ</sup>山<sup>やま</sup>仙<sup>せん</sup>人<sup>じん</sup>も。何<sup>なん</sup>事<sup>じ</sup>もて。母<sup>きみ</sup>  
必<sup>かなら</sup>ず成<sup>な</sup>遂<sup>とげ</sup>むと思<sup>おも</sup>ひて。勉<sup>つと</sup>強<sup>め</sup>むべし。と諭<sup>さと</sup>示<sup>し</sup>され。



霧島山の神も力の及ぶ限で強行へず。成らむ  
事は無き物ぞ。と宜へりとぞ。是を以て。鈴屋大  
人も。家の職業。莫怠りそ。風雅士の文を書とも。  
歌を詠むとも。よる氣吹屋大人を。成せど成也。  
成さぬむ成らび。成は事業を。成さびて棄人  
のはかなさ。とも詠れど也。  
誠の道よ入隨ら。心よ誠无き事。

誠の道とて。即ち日大御神の御道よ。鈴屋集  
よ。國二よ。道を在れども。天照を。日の大神の道  
ぞ。正道。まゐる玉銚百首よ。天地の極み御照り  
光は。日み大神の道と。此道と。在依。大平主の解  
よ。天地の限で照渡り給ふ。日の大御神の道と  
云ふを。此道ぞとなり。と在依道を指て云ふ。此  
道とは。大御神の天皇命へ。御傳へ坐せ依大道

よて。下萬民に至依まで。行住坐臥一日片時も。  
離る可らざ依物故。全百首に。高御座天津  
日嗣と日の御子の受傳へ坐ひ。道は此道また  
天下。青人草。朝夕に。御恩頼と依憑依道。此  
道とも詠れ多め。扱て此大道を行ふ者。心に  
虚偽無く。眞實を失ふべらび。之の教諭な聖。  
然有ば古き宣命よと。明き淨き直き。誠の心以

て仕奉れと詔ひ。丹後風土記の古語よ。天上の  
人。眞事を以て本とま。と見え。楠正成卿も。外  
を正直にして。内は邪心を含む事を。戒められ  
ため。貝原篤信も。凡て平生の心法を。眞實よし  
て偽。無依べし。中庸は誠を天に道れり。之を  
誠よま。る。人の道れり。と在依。誠を天の道れ  
聖とは。陰陽。所爲。日月の運行。春夏秋冬の次

第古今易らば草木は春生じ夏長じ秋實也冬  
藏也。毎年毎年に易也無きを云ふ。是皆天道の誠  
なり。之を誠よまるとも人の力よて。務て誠よ  
まを依を云ふ。人は天地の子なれむ。天道の誠を  
法とし。従ひて行ふべしとれ也。孔子も忠信を  
主とし。宣へ也。又言と行と心と。表裏无依べ  
し。萬の事甚嚴くと母。誠無くむ。玉の盃は底無

きの如く如くれるべし。言ひ井澤長秀も。信无く  
しては。人と言ひ難し。平生心を付て。毎事皆信  
にと思ふべし。人を萬皆好む所よ。因依事花好  
み所に。諸花の集依る如し。信を好む心止ざ  
れば。信みみよ成依物なりとて。源頼信朝臣の  
乳母子。藤原親孝の家よ。盗人ぬまびとは入て。其愛子を  
質よ取て。殺さむとせ依を。此朝臣の一言よて。

佐助正し事を云ひて。是よりして頼信よ人の  
歸伏する事。彌増よ成よけ正と云也。此故事を  
集に出る。良齋問話よ。荀子も心を養ふを誠  
よ。善きを莫しと云ひ。司馬光も誠を以て心  
を盡し。已を行ふの要とを。誠を眞實よして。詐  
偽無きを謂ふれり。琴瑟鐘鼓は。無情の物なれ  
ども。怒て奏せられ。憤激の音を發し。悲て奏せ  
れ。慘戚の聲を生ず。無情の物よて。至誠よ  
りして。感動するなり。周易の中孚卦よ。豚魚  
の無知れる物も。感ずるなり。凡て天下の事。智  
力の及ぶざる所有。至。智力は。凡て。頼む時は。意外

の憂ひ有べし。誠を主とせざる時は。天地鬼神と  
擁護し。人心も。服従するなり。孔明の蜀を  
治めし時。李平廖立を黜けし。孔明の死を聞  
二。人共よ。流涕し。病を發し。死よ至る。孔明の  
誠。人を感ずる所なり。郭子儀。郭子儀。回紇と戦ふ時  
單騎よて。敵陣よ入り。利害を説し。回紇大  
に感服し。羅拜して。兵を引し。郭子儀の誠。人  
を感づるれ。聖公。菅公。此訟を聽れし時。其言終ら  
ざ。依よ。兩人。輒愧し。公を見。依も。恐れ有りとて。  
自殺せし。公。此誠。人を感ぜし。依。聖公。猶委  
く説。ま。多清。人。此書。依。牧民。心鑑。ち。ふ。物。よ。と。信  
を。百。行。此。本。れ。り。故。に。聖。人。謂。く。人。と。し。て。信。无

くだ。車の輓軌げんきつ无なきごの如ごとし。何を以もて之これを行なむ。又また曰いわく。人信ひとまこと無なくぞ立たむ。夫それ天道てんたうを誠信せいしんを以もちてむ。故ゆゑよ四時しじ行なれ。寒暑かんしよ正ただし。地道ちだうは誠信せいしんを以もちてび。故ゆゑよ山川さんせん寧やまくして潮汐てうせき應たうむ。氣運きうんを以もちてび。故ゆゑよ君子くんしに非あび。凡まづて人ひとと交まじひ。一言いちごん信まことならむ。必かならずむ吾われを視みて虚譎きよぎの徒ともがらと爲なし。一

事信じまことならむ。必かならずむ吾われを視みて无徳むとくを輩とがらと爲なむ。と在ある。漢人かうびとはへも。心有こころ依ある。如斯かく説いへ依ある。況まして大御神おほのみかみは本もとつ御國みくにに生うま。其その大道おほのみちを歩たぶ。依徒よとを。須臾しよゑの間まも眞實まことを心神こころを。放はなち失うふへき物ものは。

日ひニ難あたり。事ことを取とり。外たづな事こと。

此こを人間ひとの世界よに生うま。視息しそく居ある。依ある。一切いっけつに神祇しんぎ

の御恩頼ごおんちいよ。漏もは、事无ことなき物ものよし在あれど。一日いちにち片へん時しも取外とりはずして。難有ありがたき御神德ごしんとくを忘わすれ奉たてまつはまじき由よしの教訓みましへと見みゆ。其そは源親房みなちのちのよき卿きやうの神皇正しんこうせい統とう記きよ。神かみを人ひとを安やすくするを本誓ほんせいとま。天下てんかの萬民ばんみんを皆みな神物かみものなま。君きみを尊たうとく坐ませども。一人いちにんを喜樂たのしみしめ。萬民ばんみんを困くる苦くむること。天てんも許ゆるさば。神かみも幸さいひせぬ。謂いわなれど。政まつりごとの可よし否よしよ。從したがひて。御運ごうんの通塞とうげ有ある可べし。況いはして。人ひと臣しんとして。君きみを尊たうとみ。民たみを愍あはれ。天てんに踏ふみ。地ちに踏ふみ。日ひつ月げつの照てらむを仰あやぎて。心こころの穢けがれ。光ひかり彩いろよ。當あたらむこと。在あるを恐おそぢ。雨露うろの施ほむ。を見みて。身みの端正ちゆうせいあらば。して。恩惠めぐみよ。漏もむ。

ことを省あつるべし。朝夕あすひも長田ながた狭田せうたの稻種いなねを喰くふも。皇恩こうおん昭あり。晝夜しゅうやに生井いけ榮井さかの水みづは。流ながれを吞のむも。神德かんとくは。是これを思おもひ。入いれ。有あら。任まかせ。て。欲ほを恣しし。私わたくしを先さきとし。公こうを忘わすれ。心こころ有あら。理ことわりあら。じ。と。宣賜のたまひ。先師せんしは。説せつに。世よに。所あら。有ある。事こと物ものは。此この天地てんちの。大おほき。及および。我われ。二ふたの。身み體たい。ま。て。も。盡つくく。天神地祇てんじんちぎの。御靈ごたまよ。資よを。成なせ。衣い。物もの。一ひととして。神かみの。惠めぐみ。君きみは。賜物たまものに。て。各おの。二ふた。某それ。二ふた。に。神等かみたち。比ひ持もち。分わけ。坐まし。命いのちを。助たすけ。作つく。衣い。食し。住ぢゆうの。道みち。一ひととして。神かみの。惠めぐみ。君きみは。賜物たまものに。

非ざる事こと无なき。其大その約たほを申まをらむ。先天まづ之の御中の主な

大神おほ二柱のの皇み産ま靈たま大神の彼伊邪那岐伊邪那美いざな

大神おほまた天照大御神あま及び其和魂大直日神その

多速須佐之男神たやま及び其荒魂禍津日神その

何事なににも其本そのと坐ましまり大神等おほなる事こと靈の真たま

柱おしろに記しせ依よ如ごとく如ごとく也なり。玄道たむ曰い。うは天之御中あめ

上皇じやう大たい一いつ。また上じやう二大たい一いつ。とも申まを奉たまり。西洋しやうにては。邪爾夫天神やにふと申まをし。二柱ふたの皇み産ま靈たま大神のを漢あ

土くよてを盤ばん古真王こしん大元聖母たいげんと申まを奉たまり。天竺てんに  
ては。大梵自在天神だいぼん。摩醯首羅天まししゆら。嚩耨捺羅天ぶなつら。  
第六天魔王だいろく。稱奉まをて。此天地日月このの未まだ成な  
らざりし。無始むの時ときより。高天原たかとて。所謂い依よ北ほく  
極きよく紫し微び宮みやなる神域しん。隱御身いんと大坐おほして。其その  
最もとも奇きく妙たへれる御神徳ご。因よて。天地萬物てんの造な  
化り初はじめし事こと。伊邪那岐大神いざなをむ。玄家げんにてを。無極む  
大道たい。君くんとも。天皇大帝てんとも申まをし。儒家じゆにては。昊ほ  
天てん。上帝じやうとも。天帝てんとも。稱奉まをりて。此國土このを造た立り  
坐まして。後のち。高天原たかなる天皇祖神あまの御所ご。復た  
命めいして。悠く久く。其大御前そのに立たして。其御靈徳ごを  
受う持も賜たまひて。造化さうの元機もとを摠宰も領りやう。給たまひ。あつ  
天照大御神あま。天津日御國あまを所治しよ。看みし。伊邪いざ  
那美大神な。須佐之男神す。月國つきを所知しよ。看みし。

て其御神徳を日夜此大地球に幸福給ふ事  
等の委曲き説を先師の古史傳赤縣太古傳印  
度藏志等付て見るべしまた西洋にて神祇  
の事をゴツトオツゾと云ふ由を彼國に訛誤し  
別天神と申せ依コトちふ言を彼國に訛誤し  
成らむと云ひまた隱身をカクリ三と訓む可  
しと云へる共は然依説れり其を顯事幽事と  
相對ひ現世隱世と對ひ現國を隱國と對へむ  
隱身と云ふ詞も必ず有るべき事と思ひ居  
しよ靈異記を見れば聖徳太子及び行基法師  
を隱身の聖と在はよて隱身と云へ依を上代  
の成語な依事造は知らるれむ依りさて日大  
御神の御神徳の御事及び右等の詳其餘の神  
説を別よ委曲く記し奉れる物有聖其餘の神

ニ此事を説むよ志那都比古志那津比賣神は  
風と共に成坐して其御靈なはら即その風を  
司聖賜ひ火産靈神を火と共に生坐して其御  
靈なはら即その火を知聖給ひ金山毘古金山  
毘賣神を金と共に成坐して其御靈なはら即  
その金を司聖給ひ彌都波能賣神を水と共に  
生坐して其御靈なはら即その水を知聖給ひ



埴安毘賣神也。埴と共よ成坐して。其御靈なほ

の。即埴と土を司里給ふ。此五神を姑く號けて。

五元神と申す。其を萬物盡く此五神の元靈よ

漏は、事み无れぞれ里。此中よ風神と金神と

坐せど。此を一神よ數ふること。師の具よ論を

れ多岐の如し。萬物總て此五神の元靈よ漏は

る事无き論の大意を靈の真柱よ云ひ云。三

漢土よて五行と稱じ。天竺よて四大と稱せざる

など。太古傳。印度藏志などよ云へるを見はべ

し。玄道曰。此五柱の大神を漢よては。五帝よ多

五龍とも稱し。紫微垣中の五帝座。及大微垣の

五帝座。及び地球上の大五嶽などよ。其御神

靈を留免給ひし事件等も。太古傳。命歴序考等

よ。委曲く論。借斯く世に居はよは。今日の衣食

住み本を。豐受毘賣神の御靈に資也。其衣食住

よ安居を依よ。大山津見神は。山を知して山幸

を賜ひ。大海津見神を。海を司して海幸を賜ひ。

大年御年若年比三神也。穀物よ幸ひ坐し。奥津

比古奥津比賣神を。竈所より幸ひ。御井神を。飲水を司り。阿須波神波比岐神は。人家の這入まゝ人の行く途中を守り。八衢比古八衢比賣久那斗神三柱を。門を守りて悪鬼を逐ひや。住吉神等は。海路を守り。水分神等。雨を降して國土より幸ひ。大雷神を。雷鳴をし給ひて悪物を取挫ぎ。大國主神少彦名神を。醫藥の道と禁厭比

方とを始め。殊より大國主神は。幽事を主り給ひ。手置帆負命彦狭智命を。木工家作を始め。天目一根命は。金工を始め。石凝度賣命を。鑄工を始め。天思兼神を。思慮と言語の道より幸ひ。大宮能賣神は。君親より仕へ人と交はる道を守り。石長比賣神を。壽命を司り。泣澤女神は。命乞の神也。祓處神四柱を。萬の禍事罪汚を祓ひ給ふ。

此餘このほの。天神地祇あまのつみくじのつみ八百萬神等やほよろづのつみたち各たの二く其それ二く掌しに  
別わかけて坐ます。其御恩頼そのごんらいの辱はげさを思おもへむ。世よに  
所あちか有ひ人等ひとごとの如ごと斯くて在まはること。大小盡たいせうじんく神かみの  
惠めぐみ漏もれ、事こと无なし。と論いはましを能よく想像たもふ  
べし。右みぎは如ごと此見みえ給たまへは甚い嚴みじき御功績みいさをの大おほ  
坐ます。大おほ神等かみたちも悉ことごと皆くは伊い邪ざ那な岐ぎ大おほ神かみの御み  
子孫まごよて。のつ此御國このみくには生坐あれまさぬは無なきよて

も萬國ばんこくの本國ほんこくなは事ことをも神國しんこくと稱號まををむねを  
も辨わふべし。玉銚たま百首ひやくしゆ。命いのち繫つぐ。食物くひもの被物まもの住家すまゝ  
等ら。皇君きみの恩惠めぐみぞ。神祇かみは靈德めぐみぞ。まゝ天地あめつちの神かみ  
祇かみの恩德めぐみし。無なるなせむ。一日ひとひ一夜ひとよも有あり得えてま  
しや。また鈴屋すずのや集あはる。天地あめつち間まを。何なにに付つても。神かみを  
思おもへ。神かみの御靈めぐみを。勤こめ忘われなよ。また往古いよしへを尊たがと  
ふ人ひと間の神祇かみをし母は。无なきげは想像たもふ。如何いよ

ふ事ことぞと母詠よまれ多おほし。ちて楠くすのぎ正ただ成なり卿きやうも。今日こんにち無な事ことれ依よ事ことを先まづ思おもへと宣のたまひ。明あき人ひとも。人ひと生せい一いち日にち或あるは一ひとの善ぜん言ごんを聞きき。一ひとの善ぜん行かうを見み一ひとれ善ぜん事じを行なへむ。此この日ひ方まさに虚きよ生せいせむと云いひ。或ある人ひとの或ある候きまの一日いちにち消けし難がたきを苦くるれしむ。淺あましや。思おもへば日ひ二ふたの別わかれり。昨きのふ日ひの今けふ日ふ亦またと逢あねむ。と詠よまれしなど有あ依よをも。本ほん文もんは思おもひ合あせて。分ぶん刻こく

の間まも。光くわう陰いんを空くわ虚くく暮くらをべのらむ。且かつ天あま神かみ地ち祇ちの御み恩たま頼のりを忘わすれ奉たてまつ依よまじき事ことをも熟うく大たい悟ごを可べくこそ。

立たち向むかふ。人ひとの心こころは鏡かみな里れ。己おの姿すがたを映うつしてや見みむ。此こを誰たれよまれ。聖せい人じん君くん子しの前まへに對むかひ立たむ。其その心こころの善ぜん惡あく邪じゃ正ただを。如い何のは蔽おほをむとむ。母はは。祕ひ藏かくをこと能あたむ。其その肺はい肝かんを視み依よの如ごとく。明あき亮ちやうよ見み

知<sup>し</sup>依<sup>よ</sup>、物<sup>もの</sup>なれば。心<sup>こころ</sup>神<sup>しん</sup>を明<sup>あきら</sup>白<sup>け</sup>く正<sup>ただ</sup>直<sup>し</sup>くまべし。  
との論<sup>ろん</sup>語<sup>ご</sup>な依<sup>よ</sup>可<sup>べ</sup>し。莊<sup>しやう</sup>子<sup>じ</sup>、仲<sup>ちゆう</sup>尼<sup>に</sup>の曰<sup>いは</sup>く、人<sup>ひと</sup>を流<sup>なが</sup>水<sup>みづ</sup>  
る<sup>る</sup>とも、水<sup>みづ</sup>静<sup>しづ</sup>なれど、明<sup>あきら</sup>は鬚<sup>しゆ</sup>眉<sup>まゆ</sup>を燭<sup>たく</sup>ま、平<sup>へい</sup>中<sup>ちゆう</sup>准<sup>じゆん</sup>大<sup>たい</sup>  
匠<sup>しやう</sup>法<sup>ぽう</sup>を取<sup>と</sup>る。水<sup>みづ</sup>静<sup>しづ</sup>なれど、猶<sup>なほ</sup>明<sup>あきら</sup>し、而<sup>しか</sup>依<sup>よ</sup>を況<sup>いは</sup>むや  
精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>なる聖<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>の心<sup>こころ</sup>は、静<sup>しづ</sup>な依<sup>よ</sup>をや、天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>の鑒<sup>かみ</sup>な  
里<sup>り</sup>、萬<sup>まん</sup>物<sup>ぶつ</sup>の鏡<sup>かがみ</sup>な、里<sup>り</sup>とも、至<sup>し</sup>人<sup>じん</sup>は、心<sup>こころ</sup>を用<sup>もち</sup>る鏡<sup>かがみ</sup>の若<sup>ごと</sup>  
似<sup>に</sup>多<sup>た</sup>依<sup>よ</sup>説<sup>せ</sup>な、里<sup>り</sup>。ちて駿<sup>しゆん</sup>臺<sup>たい</sup>雜<sup>ざ</sup>話<sup>わ</sup>。飛<sup>ひ</sup>驛<sup>だ</sup>山<sup>やま</sup>の天<sup>てん</sup>  
狗<sup>く</sup>の。人<sup>ひと</sup>は、思<sup>おも</sup>ふ事<sup>こと</sup>をば、已<sup>ま</sup>は知<sup>し</sup>里<sup>り</sup>多<sup>た</sup>依<sup>よ</sup>事<sup>こと</sup>件<sup>けん</sup>を載<sup>しる</sup>  
世<sup>よ</sup>依<sup>よ</sup>如<sup>ごと</sup>く。狐<sup>こ</sup>狸<sup>り</sup>の輩<sup>ともがら</sup>さへも、人<sup>ひと</sup>は、心<sup>こころ</sup>神<sup>しん</sup>を豫<sup>また</sup>は知<sup>し</sup>

依<sup>よ</sup>と有<sup>あ</sup>依<sup>よ</sup>由<sup>よし</sup>なきを。況<sup>ま</sup>て天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>の神<sup>かみ</sup>祇<sup>た</sup>は、人<sup>ひと</sup>の肺<sup>はい</sup>  
肝<sup>かん</sup>は、みよ。心<sup>こころ</sup>神<sup>しん</sup>とも、徹<sup>みと</sup>視<sup>し</sup>し給<sup>たま</sup>ふ事<sup>こと</sup>。師<sup>し</sup>説<sup>せ</sup>は返<sup>かえ</sup>ま  
返<sup>かえ</sup>以<sup>も</sup>論<sup>ろん</sup>をまし、如<sup>ごと</sup>くにて。老<sup>らう</sup>子<sup>し</sup>も、人<sup>ひと</sup>を天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>の氣<sup>き</sup>  
中<sup>ちゆう</sup>は生<sup>しやう</sup>む。動<sup>どう</sup>作<sup>さく</sup>喘<sup>せん</sup>息<sup>そく</sup>皆<sup>みな</sup>天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>に應<sup>おほ</sup>ひ、善<sup>ぜん</sup>を爲<sup>な</sup>すも  
惡<sup>あく</sup>を爲<sup>な</sup>すも。天<sup>てん</sup>を皆<sup>みな</sup>之<sup>これ</sup>を鑒<sup>かみ</sup>依<sup>よ</sup>。闇<sup>あん</sup>昧<sup>まい</sup>と謂<sup>い</sup>ふこと  
勿<sup>な</sup>れ。神<sup>しん</sup>を我<sup>わが</sup>形<sup>かたち</sup>を見<sup>み</sup>依<sup>よ</sup>。小<sup>せう</sup>語<sup>ご</sup>と謂<sup>い</sup>ふこと勿<sup>な</sup>し。鬼<sup>き</sup>  
え我<sup>わが</sup>聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>く。人<sup>ひと</sup>陽<sup>やう</sup>善<sup>ぜん</sup>を爲<sup>な</sup>さむ。人<sup>ひと</sup>自<sup>みづか</sup>ら之<sup>これ</sup>を報<sup>かへ</sup>

人陰善を爲さば鬼神きんじん之これも報むくゆ。人陽惡を爲な  
 さだ。人自ひとみづから之これを治しゆ。人陰惡を爲なさだ。鬼き神じん之これ  
 を治しる。故ゆゑも天てんは人ひとを欺あまひらむ。之これも示しめす。影かげを  
 以もちてし。地ちを人ひとを欺あまひらむ。之これも示しめす。響ひびきを以もちて  
 此これ皆これ自然じねんの符ふな聖せいとい言いれ。まゝ或ある書しよ。人じん間かん  
 此これ私し語ごを。天てんの聞きくこと雷らい也ごと如ごとし。暗あん室しつの汚ま心しん  
 は。神しんの見みゆこと電でんの如ごとし。大だい學がくも中ちゆう  
は。神の見ること電の如しとも見ゆ。大。學。中。は。誠。あり。

外そとも形かたち依よと謂いふ。故ゆゑも君子くんしを必かならず其その獨ひとりりを  
 慎しんむとも十じゆ目めくの視みゆ所ところ十じゆ手しゆの指さす所ところ其その嚴げんな  
 るゆれ。富とみを屋やを潤うるし。徳とくは身みを潤うるす。心こころ廣ひろく體たい  
 胖ふとな聖せい。故ゆゑも君子くんしを必かならず其その意いを誠まことにいははすとも中ちゆう  
 庸ようも君子くんしを其その睹みざゆ所ところも戒いさめ慎しんみ。其その聞きざゆ  
 所ところも恐おそ懼おそは。隱かくれ多おほゆ。聖せい見みゆ。其その莫なく。微こほ  
 きなるよ聖せい顯あきなるを莫なし。故ゆゑも君子くんしは其その獨ひとりりを  
 慎しんむとも内うちも省しるて疚いし。らざれど。志こころも惡にくむ  
 こと無なしとも。詩しも云いく。爾なんぢの室しつも在あるを相あ依た。尚さら  
 くそ屋や漏ろうも愧かたじけなく。故ゆゑも君子くんしを動うごけして敬けいし。言こと  
 ばして信しんばと。鈴すず屋や大人だいじんも眼めも見みえぬ。神かみの心こころ  
 も所ところ見み多おほ聖せい。

此。神業は。可恐き物ぞ。大凡も莫思ひそ。と詠れ

しなま。橘經亮の筆記。熊澤伯繼の藤樹翁。
 初めて見えし時。皆人の參詣は社。神を無し。
 心の中。神は坐まり。と詠は反し。皆人の參
 詣は社を。鏡なま。己が心の隨に映ふ。と詠れし
 事を載せは。本文に能似たは歌なり。孔子を
 を視。其由所を觀。其安を察。亦先覺する者。是賢
 を逆へむ。不信を臆らば。抑亦先覺する者。是賢
 のとも。孟子軻を人よ存する者。眸子より良き
 を莫し。眸子は其惡を掩ふこと。能たば。曾中正

しけれ。眸子瞭けし。曾中正し。りざれ。眸子
 子。眸子とも云へる。を并せ。按ふべし。管子莊周
 李克等も。人を觀。法を説き。多ま。また相法と
 云ふ。事も。古來有は。事なれど。頓は。此を信み
 て。性命を過ちし。人。古今屈指は。暇あらば。荀
 子。形を相。心を論む。如らば。心を論
 む。る。術を擇ぶ。如らば。形は。心は。勝多。心
 を術に勝た。術正しくして。心之。順へ。形相
 惡し。と雖も。心術善し。君子と爲は。害無し。形
 相善し。と雖も。心術惡し。小人と爲は。害
 無し。と言へる。實は。ちて。或大臣の御消息。我身
 然は。説れ。

の鏡無くては。何事と知ぬ者。て候常。此鏡

と違ひ。外よ至磨く事は無く。我心を心よて磨  
き立申ま事候。我身の行ひの悪きは鏡の照  
さぬ故よて候。まゝ其曇らぬ様よ致し候事。常  
の身の行ひの善悪を人よ尋ふよ至外之無く  
候と宜ひ。具原篤信を。明の心は鏡よ向ひて。物  
を照を如く。善人に近き習ひて引立られ人た  
は心の善を磨きて。常よ善き道を求むべしと

云ひ。唐の太宗の人を以て鏡とまきだ行ひぬ  
善悪を知候と云ひし語等を本文と趣きを異  
なきど母。皆愛たき論教れば。因よ記し付つ。  
件の説をも。今般木村信雄主の需に因至て。古  
典を遍く考索は事も得せて。大抵暗記の任を。  
童蒙の徒よ示を爲よとて。頓よ抄出つは物  
し在れぬ。僻説も有至ぬ可く。厭足らば思ふ事



將多<sup>おほたほ</sup>有<sup>あり</sup>はを<sup>を</sup>其<sup>その</sup>を<sup>を</sup>猶<sup>なほ</sup>次<sup>つきく</sup>ニ<sup>に</sup>書<sup>き</sup>記<sup>あつて</sup>改<sup>あらた</sup>め<sup>て</sup>むと<sup>ま</sup>君<sup>を</sup>。  
子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>見<sup>み</sup>流<sup>め</sup>眼<sup>め</sup>ぞ<sup>を</sup>愁<sup>つち</sup>き<sup>を</sup>鏡<sup>かみ</sup>草<sup>くさ</sup>淺<sup>あ</sup>き<sup>を</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>底<sup>そこ</sup>ニ<sup>に</sup>映<sup>うつ</sup>して。

文久二年十二月抄録し終ぬ

矢野玄道

明治十年十二月校正し終ぬ

石丸忠胤

# 版權免許

明治十年

十一月七日

著述人

愛媛縣士族

矢野玄道



當時東京府第七大區一區  
下澁谷村十番地寄留

出版人

愛媛縣平民

石丸忠胤



當時京都府丹後國與謝郡  
第七區二百二十七番地寄留

賣 弘 所

東京有樂町三丁目貳番地

全 芝三島町十番地

全 小傳馬町三丁目新道

京都室町通御池下九

大阪心齋橋南久寶寺町北八

全 心齋橋北久太郎町

全 心齋橋通本町北八

全 京町堀上通三丁目

全 心齋橋通本町北八

全 心齋橋南壹丁目

全 心齋橋通本町北八

弘 道 社

山 中市兵衛

吉 岡十次郎

池 村久兵衛

前 川善兵衛

柳 原喜兵衛

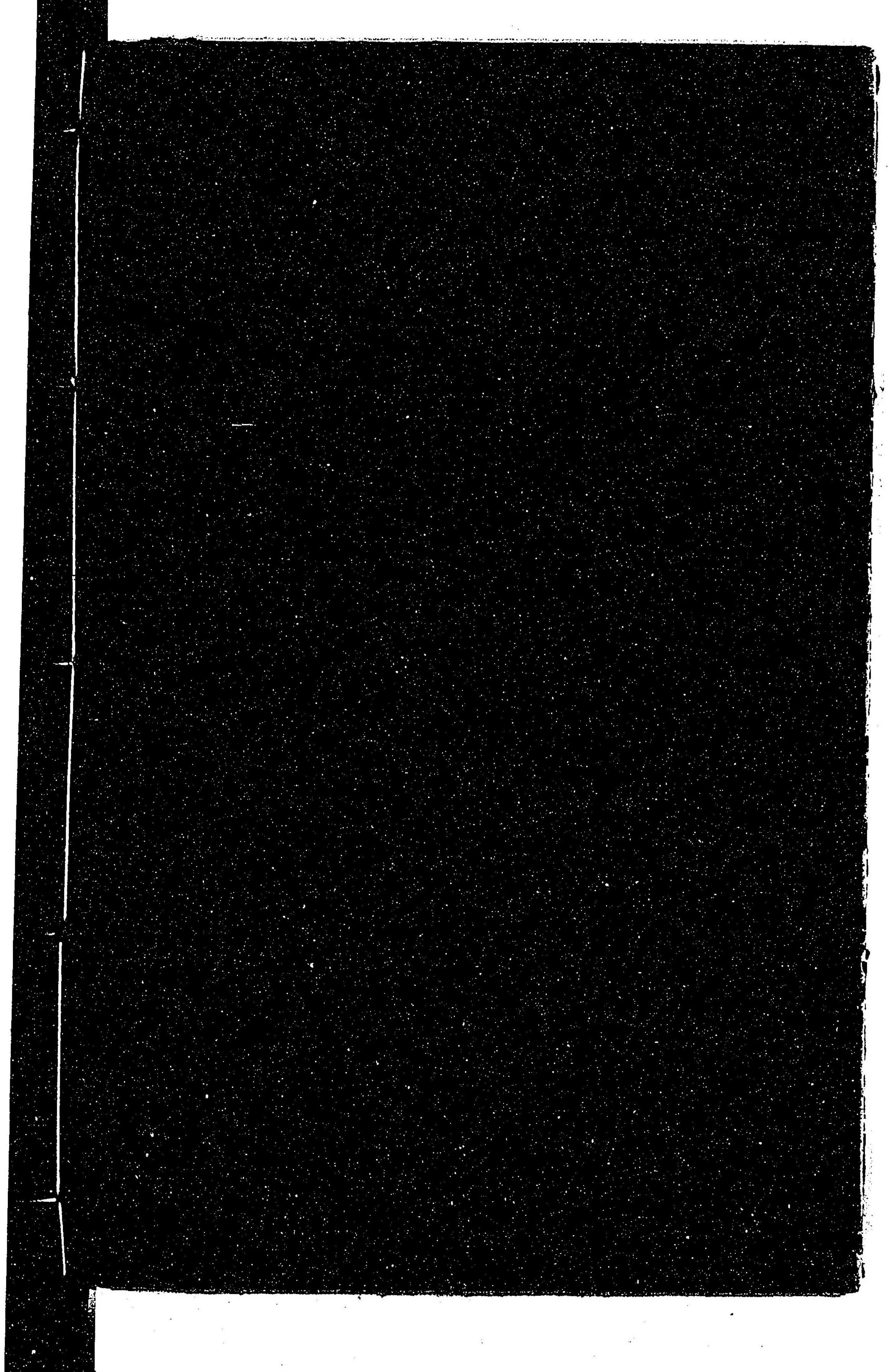
赤 志忠七

松 田正助

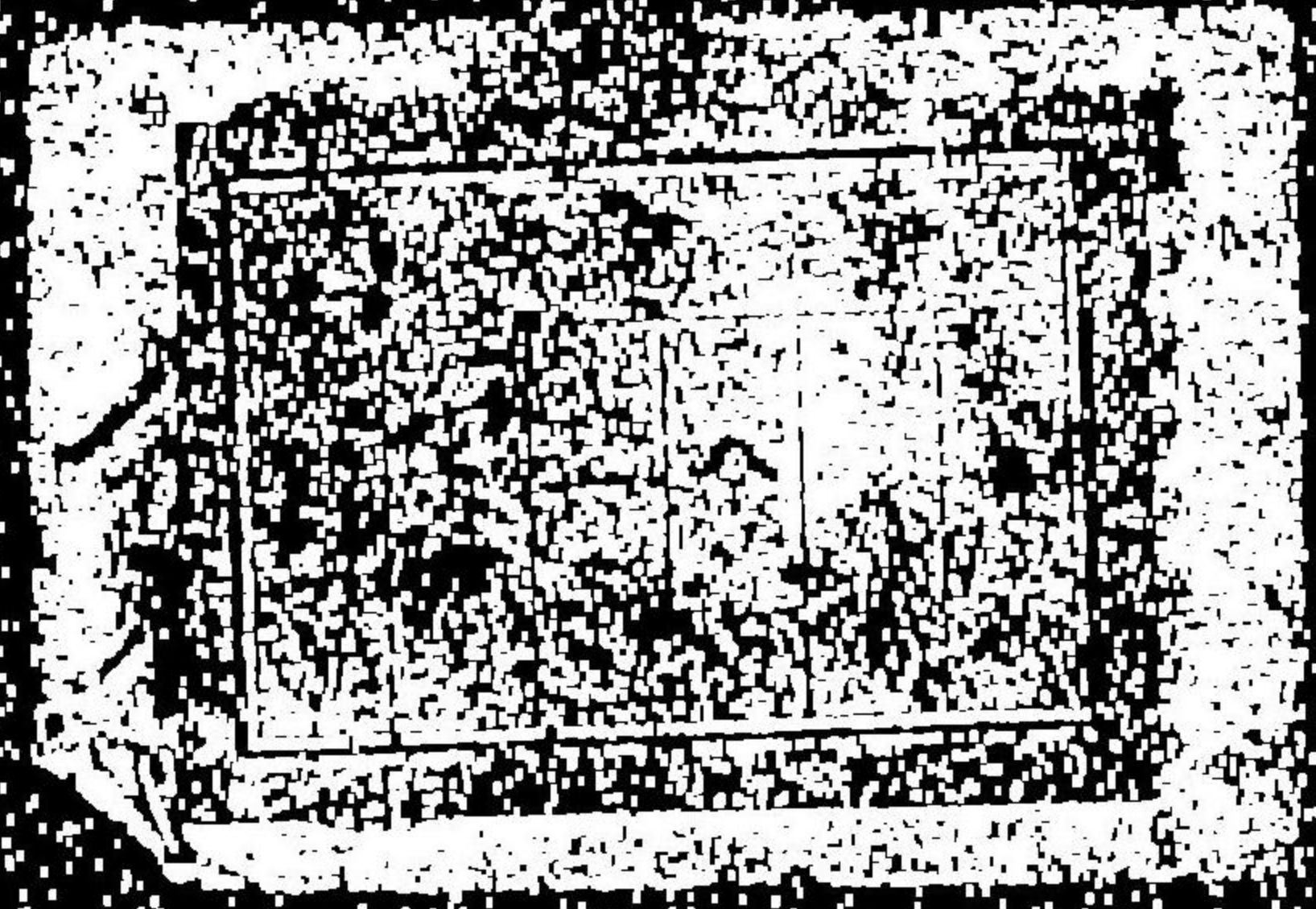
中 村彌七

山 本政次郎

倉 澤正七



8  
164



014101-000-9

8-164

七箇条鏡草

矢野 玄道/著

M10

ABB-0366

